



CIRSE (Cardiovascular and Interventional Radiological Society of Europe) 2010 学会報告  
久原 麻子

2010年10月にスペインのバレンシアで開催された CIRSE に参加させていただきました。太陽光が降り注ぐ広いモダンな会場には様々なデバイスを展示したブースがあり、ホールでは vascular、oncology、neurology などジャンルを問わず様々なセッションが行われていました。

まずは EPOS を見に行きました。私は、『Coil embolization of aneurysm in a duplicated common hepatic artery』というテーマで演題を出しました。やはり、実際に会場で自分の名前と演題を見ると、感動しました。拙い内容と英語の文章に嫌な顔一つせず、いつでも爽やかに訂正を繰り返して下さった小金丸先生には本当に感謝致します。

小金丸先生は、『Efficacy of embolization of the visceral artery with GDC-10』というテーマで、GDC-10 という細いコイルを用いて超選択的に腹部血管が TAE される様子がクールに呈示されていました。

その後、幾つかセッションを聴きに行きましたが、なかなか英語が聞き取れず、・・・全神経を聴力に集中させて・・・も難しく、スライドを目で追いかけるのが精一杯で、英語力の無さを痛感させられました。その中で印象に残ったのは、前立腺肥大症に対する TAE でした。私は内視鏡的治療しか知りませんでしたが、TAE で合併症が少なく、volume reduction が得られるという発表があり驚きました。手技的に難しく何時間も要することがあるようでしたが、高齢化も進み、これから目にするが増えるかと思いました。

今回の学会でたくさんのポスターや機器展示を見ながら、様々な画像やデバイスを選択しそれを駆使する IVR という分野は知識やテクニックだけでなく創造力が必要だと思いましたし、とても魅せられました。女性医師も見受けられ、大変刺激を受けました。



会場のあったバレンシアはオレンジやパエリアが有名なリゾート地で、朝夕は肌寒いものの昼間は日差しが強く汗ばむほどの陽気で、経済危機を感じさせない活気に溢れる街でした。バレンシアの市場の前のオープンテラスで身振り手振りで注文し食べたパエリアは本当に美味しく、今でも忘れられません。

寄った(酔った?)バルセロナでは、ガウディをはじめとするユニークで曲線的な建築が目を楽しませてくれました。シンプルではないけれど、どこか愛着がわくような不思議な魅力がありました。しかし、何よりもサグラダ・ファミリアの存在感は圧巻でした。120年以上も前からの歴史を感じさせる石の造形と、巨大クレーンや職人が行き来する無機質な足場が競い合うようにそそり立ち、両者が不自然でもあり不思議とマッチしているようにも思いました。建築過程の展示もあり二次元の設計図からアイデアいっぱいの機材や模型をもとに三次元の建造物が出来上がっていく工程は、今回の IVR 学会で目にしたものと共通するところもあるような気がしました。



彫刻家の外尾悦郎氏は、日本で見た石造を見て石の彫刻に魅せられ、現在サグラダ・ファミリアの専任彫刻家にまでなった、と何かの本で読みました。私も今回の学会で放射線科医として自信と誇りのもてる分野を探すきっかけになった気がします。

蛇足ですが今回の学会で学んだことに加え、私は地中海の鱈アレルギーであることが判明しました。当直帯に蕁麻疹で病院にやってくる患者さんの気持ちを初めて体感しました。日本でなくスペインで。またまた小金丸先生には大変ご迷惑おかけしました。有り難うございました。

あっという間に日本に帰国する日がやってきて、早朝出発し丸1日かけて日本に帰国しました。大きいなーと思った飛行機が、世界初の総2階建てジェット旅客機エアバス A380(旅客数 500 席以上!)であったことが分かったのは、帰国後に稲吉先生に話してからでした。

最後になりましたが、早淵教授をはじめとする医局、同門の先生方、快く学会へ送り出して下さった稲吉先生、学会の準備など御指導下さった小金丸先生に感謝致します。学会中に業務をして下さった小林先生、楠元先生も有り難うございました。この場を借りて、皆様に深く御礼申し上げます。本当に有り難うございました。

